
Oneself

時間

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Oneself

【Nコード】

N0978Z

【作者名】

時間

【あらすじ】

幼い頃から今までの記憶が無い少年、静馬。

表向きはいつも笑っているが…裏向きは本当は誰にも言えないくらいの臆病。

そして、ある日、出会ってしまった。

BL?要素はいるかもです。すみません。

Prologue

自分自身は何者なのかが分からない。

その恐怖心で自分に期待、しなくなった。

誰かが、誰かが僕の事を分かってくれる人が居たら、

僕はその人を信じるだろうか?..。

何も分からない...ただ僕は...人を信じる事も出来ない。

氷葉 静馬

中学3年生の男の子。

表Ⅱ 明るくて元気で誰にでも優しい。

裏Ⅱ 生意気のように冷たくて臆病。

記憶喪失。幼い時の頃の記憶が無い。

表Ⅱ いつも友達として、成績優秀でよく笑う。

裏Ⅱ 他人を信じない、記憶がないせいの臆病さ。

本当の自分自身が不明。

上塚 栢

18歳くらいの男の人。

明るいようで冷たい人でよく笑う。

静馬によく絡む。

とても、不思議な人。

#1 Encounter

自分自身が誰なのか。

自分自身はどこに居るのか。

それすらも分からない。

何も分からない。

ただ、笑っている。

無意識に、人を傷つけてしまう。

そんな自分がいやで…いやすぎて。

自分自身を分かってくれる人を探していた。

「静馬！今日、遊ぼうぜ！！」「ニコッ

「あっ…ごめん。今日は用事があるんだ。」「ニコッ

「そっか、じゃあまた今度遊ぼうぜ！」「ニコッ

「うん！」「ニコッ

少年の名前は『氷葉ひょうは静馬しずま』

「はあ…雨だ…。」

今日の天気は雨だった。

「静馬、傘は？」

「無い。濡れて帰るからいいよ。」「ニコッ

「あっただけ。」

「大丈夫！じゃあな」ニコッ

「うん！」ニコッ

静馬は雨の中を走って帰った。

早く逃げたかった。

あんなの僕の居場所じゃない。

「ハア…ハア…ハア。」

雨の中を静馬は歩いていった。

僕の居場所なんか無い。

本当は分からない。自分がどこの誰なのか…。

何者なのかも、分からなくて怖くて…。

「……………」

静馬は道端を座り込んだ。

「…誰が僕の事を知ってるの?…。」

誰も居ないところで一人雨に打たれて座っていた。

「お前。」

「……………」

静馬に話しかけてくる一人のスーツを着た男。

「氷葉、静馬だな？」

「えっ…?」

カチッ！

「!?!?…。」

スーツを着た男は、静馬に銃を向ける。

「やっと、見つけた。死ね。」
「!?!?.....」

バキューンッ!!!!!!

「なッ!?!?.....貴様.....」

スーツを着た男が倒れた。

「!?!?.....」

「大丈夫? 静馬」ニコッ
「えっ?.....」

『静馬。』ニコッ

「.....栢.....」

「覚えてる? 逃げよう。」

「!?!?.....」

何で.....僕はこいつの名前を知ってる?.....

グイッ!

「!?!?.....」

男は静馬の手を引っ張る。

「行こう。」

「!?!?.....」

そして、静馬は男と逃げた。

#2 Red Blood

「つて…あんだ誰!？」

「今は走つて!!」

「はぁ!?!?。」

「待て!!!!!!」

静馬と男に後ろには数人のスーツを来た男が追いかけてくる。

「ちよとごめん。」

フワッ

「うわぁ!?!?ちよつ!!!!」

静馬は男にお姫様抱っこをされる。

「…何するんだよ!!」

静馬は顔を真っ赤にして暴れる。

「いいから、いいから。つかまってて!」

「!?!?うわぁ!!!!!!」

男は軽々と屋上を飛び越えていた。

「…あんだ!何者なんだ!？」

「…俺は…静馬の従者だよ」ニコッ

「はぁ!?!?従者?!?。」

「いいから、今は逃げるよ!」

「うわぁ?!?!?。」

僕はこんな奴知らない。

記憶に無い。

まあ、無いのは当たり前だ。

僕には記憶が無いんだから。

「…栢…。」ボソッ

バキューンッ！

「！？…。」

突然銃声が鳴った。

その音に驚いて目を開ける静馬。

「何？…。」

「人間同士が殺しあってるんだよ。

今はこの世界はおかしいから。」

「！？…。赤…。」

「静馬？」

真っ赤な赤…真っ赤な血の色に染まる。

染まる…染まってしまう。

『静馬…ごめん。』

染まってしまった。真っ赤な赤に、真っ赤な血に。

「静馬？」

「…僕は…誰なのかわからない。」

#3 Discovery

僕は誰だ?…。

誰だ、昔僕に手を差し伸べてくれた人は。

「静馬。行こう」ニコッ

あなたはいつも…僕に優しくしてくれる…。

それはどうして?…。

ズキッ!

「グッ!…。」

「静馬!」

静馬は頭に激しい激痛が走る。

「グッ…痛ッ…。」

「静馬…。」

静馬は視界が薄くなる

僕は昔の記憶を思い出しちゃ駄目なのか?…。

「……………」

「…!?!?…」

男が静馬にキスをした。

「!?!?…」

「ごめんね」ニコッ

「しておいて！笑ってるな！！！！」
静馬は顔を真っ赤にした。

最悪だ！僕のファーストキスが！！！！！！！！！！

バキューンッ！！！！

「うわぁ！？撃つて来た！？」

「大丈夫だよ。」

「静馬様！」

「静馬に何してんだ！！！！」

後ろから、誰かがスーツの男を襲い掛かった。

「！？…。」

「チツ…だからいやなんだよ。」

「静馬様に手を出さないでほしいよねえ」ニッコ

「へいへい。」

そして、静馬の目の前に来た人は。

”妖怪”だった。

「！？…妖狐！？」

「当たりです！静馬様！」ニッコ

「知ってて当たり前だろう？」

「えっ？…。」

静馬は啞然と半分に驚いていた。

何で…僕の名前を知ってる？…。

「やっぱ、覚えてないか。」

「それは言わない約束でしょうが！」

少女が少年を回し蹴りする。

「グヘッ！」

少年は痛そうな顔をしていた。

「あつ…初めまして？私は半妖狐です。えっと…鬼妖きようと申します！」

ニコッ

「俺も、鬼妖こいっと一緒に半妖狐。名は、脊妖せようだ。」

ズキッ！

「痛ッ！…。」

「大丈夫ですか！？静馬様！」

「…あつ…うん。」

今日だけ何でこんなに激痛がはし…。

フラッ

「静馬！」

「静馬様！」

静馬達がいる所は空だった。

静馬はそのまま下に落ちて行った。

僕の過去はなんだ？…誰か僕を救ってはくれないのか？…。

フワッ

「!?!?…栢様!」

栢が静馬を受け止めた。

静馬は静かに眠っていた。

「…本当に変わらないな、静馬は。」ニコッ
「zzzzzz。」

僕を闇から救ってくれる人はいるのだろうか…?。

4 H o u s e

誰だか、分らない。

自分自身を失ってしまつて。

何も思い出せなくて。

苦しくて、辛くて、他人を見てるだけで寂しくてうらやましくて。

自分自身が初めて、無理をして孤独って分かったような気がしていた。

パチッ

静馬が目を覚ます。

「……………」

静馬は綺麗な白いベッドの上で寝ていた。

「……………」

辺りを見渡したが誰も居ない。

ベッドの隣にある小さな机に薔薇が入ってある花瓶が合った。

「……………」

静馬は立ち上がろうとする。

ガクッ！

「!?!?……………」

足が極度に震えていて、立ち上がることが出来なかった。

なんだ？…これ？どうして？…。

「静馬様！大丈夫ですか！？」

一人の可愛い少女が静馬を心配して駆け寄る。

「…あつ…って誰？」

「あつ、鬼妖です。人間の姿の」ニコッ

「あつ…そつか。」

「今日一日は足は動きません。」

「なっ！？」

「回復するまで、結構時間がかかります。今日はここで安静しておいてください。」

それとも、ご家族が心配されますか？」

「！？…。」

静馬の動きがピタリツと止まった。

「…僕が家に居なくなったら…逆に喜ぶよ…皆。」

「えっ？…。」

ガラッ

「喰いもん。買って来たぞ。」

脊妖が人間の姿でお弁当を買って来た。

「脊妖、遅いです！」

「うつせな！こっちだって、こんななれない姿で買い物とかマジないぞ！」

脊妖が文句を言う。

「で！ここは誰の家なんだ？」

「ここは、静馬様と私達の、秘密基地いえですよ！」ニコッ

「ふゝん。こんな家なら僕ここで住んでもいいかもしれないなあゝ」

静馬はベッドに寝転がる。

僕が居ても、誰も心配しない。誰も気にしない。

「静馬。」

「!?!?。」

「栢様？」

「栢さん!?!」

「栢?!?!ん?!?!」

栢が静馬にキスをした。

「う…いきなり何するんだよ!?!」

「朝のキス？」ニッコ

「最悪!?!?!?!?!」

静馬は顔を真っ赤にして、ちょっと半泣きな顔をした。

「まあ、いいじゃない？」ニッコ

「…もう知るか!?!」

僕はこの人に勝てません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0978z/>

Oneself

2011年12月7日22時53分発行